

令和七年度 入学試験（一般選抜試験B日程）問題

国語

受験番号

◎指示があるまで開かないこと

【注意事項】

1. 受験票を座席表の横に置くこと。
2. 試験開始後乱丁、落丁が無いかを確認すること。印刷不鮮明がある場合は監督官に申し出ること。
3. 机上には、受験票、鉛筆およびシャープペンシル、消しゴム、定規、時計（辞書・電卓・端末等の機能のあるものは不可・アラーム機能は停止）以外は置いてはならない。
4. スマートフォン等の電源は切ってカバンにしまうこと。
5. 解答時間は六〇分である。
6. 試験開始後最初に、問題と解答用紙に受験番号を必ず記入すること。
7. 試験時間中の途中退室は認めない。
8. 試験中に発病またはトイレ等で席を立ちたい場合には、挙手をして監督官の指示に従うこと。

【一】次のA～Eの作品の作者を①～⑥から選び番号で答えなさい。(一〇点)

- A 「源氏物語」 B 「徒然草」 C 「枕草子」 D 「奥の細道」 E 「土佐日記」  
① 吉田兼好 ② 藤原道長 ③ 清少納言 ④ 紫式部 ⑤ 紀貫之 ⑥ 松尾芭蕉

【二】次の文章の( )に入れるのにふさわしい語を□から選んで答えなさい。(二〇点)

- A 後ろ( )を引かれる思いでその場を後にする。  
B 猫の( )ほどの庭。  
C 美味しい料理に( )鼓を打つ。  
D ( )で風を切って歩いている。  
E 言いたいことを言ったら( )がすぐ思いである。

目 手 足 舌 胸 顔 首 耳 肩 鼻 口 髪 額

【三】それぞれの傍線部に当たる漢字を含む熟語を、各群の中から一つ選び、番号で答えなさい。(一〇点)

- A 破ソ<sup>ン</sup> ①ソ<sup>ン</sup>得 ②ソ<sup>ン</sup>在 ③子ソ<sup>ン</sup> ④ソ<sup>ン</sup>敬  
B 修セ<sup>イ</sup> ①セ<sup>イ</sup>存 ②セ<sup>イ</sup>格 ③セ<sup>イ</sup>義 ④セ<sup>イ</sup>治  
C 就ニ<sup>ン</sup> ①ニ<sup>ン</sup>耐 ②ニ<sup>ン</sup>務 ③確ニ<sup>ン</sup> ④懐ニ<sup>ン</sup>  
D 評カ<sup>リ</sup> ①カ<sup>大</sup> ②対カ<sup>カ</sup> ③カ<sup>失</sup> ④成カ<sup>カ</sup>  
E フ担<sup>担</sup> ①フ与 ②フ報 ③恐フ ④フ荷

【四】次の文章を読み、後の問に答えなさい。(四五点)

あなたが初めて行く店や待ちあわせ場所を探すとき、欠かすことができないのが、スマートフォン。あなたが初めて行く店や待ちあわせ場所を探すとき、欠かすことができないのが、スマートフォンの地図アプリだろう。今や、こうしたデジタルメディアに進化した地図であるが、また文字すら存在しなかった紀元前の原始社会でも、人間は地面や岩壁などに地図を描き、身のまわりの生活空間の情報に加え、その外部に広がる未知の世界のイメージさえも伝達しあっていた。個人が直接経験できるAハンイを超えた空間——「世界」や「社会」——を共有可能なイメージとし

て全域的に可視化することで、個人と他者・世界を媒介するメディアとして、地図は社会的に機能してきたのである。

こうした地図は、世界をありのままに「コピー」しているかのように思えるが、実際は描き手である人間によってイメージされ、意味づけられた世界を「表現」しているにすぎない。それでも人々は、その時代・社会の規範や欲望に基づいて地図を描き、読むことを通して、地図に表現された世界像を「こうあるべきもの」として **ア** しているのである。

二一世紀に入ると、地図もデジタル化が急速に進み、そのあり方は大きく変容した。 **I** 二〇〇五年に登場したグーグルマップは、「世界中の情報を整理し、世界中の人がアクセスできて使えるようにする」というグーグル社の企業理念のもと、世界中の **B** ショウサイな地図や衛星写真、道路沿いのパノラマ写真を無料で見ることができ、ヴァーチャルな世界旅行を実現する画期的なサービスとして、私たちの生活に大きなインパクトをもたらした。

それに、ツイズイしたヤフーやアップルの地図アプリも含め、それさえあれば、世界は自分の手のなかにあるようにすら思える。だが、本当にそうなのだろうか。 **II** 、恋人と初めてデートするとき、グーグルマップさえあれば飲食店を探すのに苦労しないが、地図上で見つけた店にいざ向かってみると、周辺はいかがわしいエリアで気まずい思いをするかもしれない。また、韓国では、グーグルマップの機能が一部制限されており、日本版と同様の使い方ができるわけではない。さらに中国では、国の規制により、そもそもグーグルマップを使うことすらできない。

このように、じつは世界中の情報が整理されているわけではなく、世界中の人々がアクセスできるわけでもないグーグルマップは、世界を描き、世界を開いているといえるのだろうか。逆に、**①**世界を閉ざしてしまう側面はないだろうか。

グーグルマップにおいて画期的だったのは、地図情報を「検索」できるシステムを導入したことである。インターネットで情報を検索する(ググる)のと同様に、検索窓に自分がアクセスしたい場所の地名やキーワード、住所などを入力すれば、該当する地図情報が瞬時にピンポイントで表示されるようになった。それは、地図が検索のための巨大な「データベース」になったことを意味している。従来の地図であれば、たとえ詳しい情報を探す場合でも、まずは自分で地図を見渡して、徐々に焦点を絞っていくというプロセスがあり、そのプロセスでは必ずしも自分が探してはいなかった情報にアクセスする可能性があった。しかしグーグルマップは、こうした地図を見渡すプロセスや **イ** 性を排し、各自が求める個別の情報だけをデータベースから効率的に抜き出すことを可能にした。

また、グーグルマップがスマホのアプリとして利用できるようになったのにもない、GPS機能が実装されたことも画期的だった。それによって、自分の居場所(現在地)が常に地図の中

心に自動的に表示されるようになり、自分が今どこにいるのかを定位するプロセスも省かれることになった。さらに、GPSを応用して目的地までの経路をリアルタイムで案内する機能も導入され、情報検索だけでなく、身体移動も効率化された。

こうして地図の「ナビゲーション」としての機能が強化されたことで、人間が地図を「見渡す」という側面よりも、地図が人間を「導く」という側面が強くなったといえよう。人間がテクノロジーを活用するのか、それともテクノロジーに人間が操られるのか——これからの社会の分岐点となる問題が、地図においても問われている。

検索機能によって自分が見たい情報を地図上に表示させ、GPS機能によって自分を地図の中心に位置づけることは、地図を個人にとって都合の良いように「最適化」する技術だといえる。

さらに、検索履歴・行動履歴の解析によって、過去に検索したことのある場所や訪れたことのある場所があらかじめ地図上で強調されたり、周辺のおすすめスポットがリコメンドされたりするシステムが導入され、機械的な地図の最適化も進みつつある。

このように情報を個人（わたし）に最適化する技術はパーソナライゼーションと呼ばれ、地図サービスに限らず、ITの分野全般で応用されている。たとえば、インターネットにおける人々の検索履歴やDコウバイ履歴はビッグデータとして解析され、個々のユーザーが求める情報を予測し、「あなたへのおすすめ」として提案するのに活用されている。このようなシステムは、「わたし」にマッチする情報に効率的にアクセスしたいユーザーにとっては大きなメリットになり、それによって新しい選択肢を手に入れることができる可能性もたしかにある。

Ⅲ 同時に、

それ以外の未来があり得たことが、私たちの生から抜け落ち、これまでの「わたし」の趣味嗜好の外へ出ることが困難になるという問題がある。

地図の最適化は、地図に固有の視野や想像力の広がりや削ぎ落としてしまうという意味で、単におすすめの商品を買いつづけること以上の問題を孕んでいるといえよう。Googleマップには世界中の地図情報が詰め込まれ、世界を分厚く描いているように見えるが、その便利さゆえ、主体的に地図を見渡したり、読み込んだりする必要はなく、世界を読解するというよりも、自分がそのつど必要とする断片的なデータを消費するという使い方が促されている。

同時に、世界最大のビッグデータ企業とされるGoogleは、便利な地図を多くのユーザーに利用させることで大量のデータを吸い上げ、ユーザーの行動をEセイギョする権力もちつつある。このように、電子的な情報テクノロジーによって個人データが収集され、個人の行動が統制されるようになる社会のありようは、「ウ社会」と呼ばれている。Googleマップにおいても、私たちは利便性を享受するために、こうした監視を受け入れているのだが、ただ監視に身をさらして「見られる」ばかりでなく、みずから世界を「見る」ことはいかにして可能であるかを、立

ち止まって考えてみる必要があるだろう。

(松岡慧祐「グーグルマップは世界を描いているか?」より。一部原文を変更した箇所がある)

問一 傍線部A～Eに関し、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄Ⅰ、Ⅱ、Ⅲそれぞれに入れるのにふさわしいものを次の選択肢の中から一つずつ選んで番号で答えなさい。

- ① たとえば      ② または      ③ とりわけ      ④ しかし      ⑤ なお

問三 空欄アに入れる語を本文中から抜き出しなさい。

問四 傍線部①「世界を閉ざしてしまう」と同じ意味の部分本文中から三十字以内で抜き出しなさい。

問五 空欄イに入れるのにふさわしい語を次の選択肢の中から一つ選んで番号で答えなさい。

- ① 客観      ② 主体      ③ 超越      ④ 信頼      ⑤ 偶然

問六 空欄ウに入れる語を本文中から抜き出しなさい。

問七 本文の内容と合致するものを次の選択肢の中から一つ選んで番号で答えなさい。

- ① グーグルマップのようなテクノロジーは決して使ってはいけない。  
② グーグルマップのような大きな権力に対して我々は無力である。  
③ グーグルマップにおいて我々は受動的な立場に置かれてしまっている。  
④ グーグルマップは必ずしも常に正しく検索できるとは限らない。  
⑤ グーグルマップは我々を未知の土地や知識へと導いてくれる。

【五】次の文章を読み、後の問に答えなさい。(二五点)

確か四十歳になったばかりのころだったと思う。そのころ私は多摩川対岸の丘陵地帯を切りひらいてつくられた公団アパートに住んでいた。一階の階段わきの部屋だった。

ある夜更、家族も寝しずまったあとに、私は本を読み疲れてひとり椅子に座っていた。石油ストーブの青い炎が傍で音もなく燃えていた。静かだった。

とくに何かを考えつめていたわけではない。いつのまにか四十歳になってしまったこと、物心ついてから三十年あるいは二十五年という時間が私のなかを通り過ぎていったというようなことを、<sup>ほうほう</sup>茫々と感じていただけだった。

と、だれか上の階の住人が帰ってきたらしく、コンクリートの階段をあがってゆく靴音が聞こえてきた。別に酔払っているようでもなく、むしろ深夜の帰宅を<sup>A</sup>エンリョするよう一段ずつ静かに踏みしめているのだが、そのコツコツという靴音が、思いがけなくはつきりと私自身の中でひびき返った。

やがて階段の靴音は途絶え、私のなかのその反響もゆっくりと消えて行って、あとにぽっかりと空洞のような<sup>B</sup>チンモクだけが残った。自分のなかに確かな何かがあるとは、かねて思っていなかったが、こんなに気味悪いほどからっぽとは思わなかった。

① 思わず私は身震いした。

私が本気に小説を書き始めたのは、その直後のころからだったと記憶している。つまり、私に小説を書かせた動機のひとつは、そんな自分の空虚さに対する本能的な恐怖心だった。

それまでも、大学の終わりごろから文芸評論というようなものを、私はぼつぼつと書いてはいた。新人批評家などと言われた短い一時期さえあった。だが、他人の小説について論ずることは、それがいかに自分に身近に思われた作品であっても、すでにその作者自身によって何らかの形がつけられている以上、「私の空虚さ」を埋めることではない。いや、からっぽでしかない私自身と、じかに向き合うことでさえもない。私にはそう思われた。

私は自分の乏しい言葉、貧しい想像力を<sup>C</sup>シヨウチのうえで、「自分自身」とさえ呼べないような頼りない私自身と向き合う作業を少しずつ、手さぐりで始めた。他人を描く興味、というよりそんな余裕も腕もなかった。

そのころ、モデルを雇う金がなくて、鏡に写した自分の顔や、自分の部屋の粗末な椅子や木の寝台やパイプを描きつづけたゴッホの絵が、とても親しかったことを覚えている。

そうして素手で自分自身をつかみ直そうと思って書き続けたのが最初の連作集『還れぬ旅』(昭和四十六年刊)だった。だが素手で、といっても、読み返すとそのころに好きだったカフカの影

響がかなり残っている。

本当に素手で、「こんなものは小説じゃない」と言われても構わないという覚悟をきめて自分のことを書いたのは、その二年後の「此岸の家」だった。これを書きながら、私は外国のものも日本のものも、他人の作品をモはや全く意識しなかった。

だが、大変に不思議に思うのは、からっぽでしかない自分自身を確かめ直そう——という気持ちだけで書き進めた作品が、結果的には妻という他人との関係を書いてしまったことだった。そして異国生まれの妻と十年かかって出来上がってきた生活らしきものの輪郭も現れてきた。郊外の団地からその後、移ってきた塔のような都心の高層アパートのまわりを吹き過ぎる黒い風、妻との間を吹き抜ける心の隙間風の中にはあるけれども。

実をいうと、作者の<sup>②</sup>私自身が驚いたのだった。かつてあの階段の靴音とともに身震いしながら改めて実感したはずの「からっぽでしかない私」は、虚像だったのか。私自身の感じ方が表面的でしかなかったのか。それとも小説というものは、作者の意志や<sup>D</sup>オモワクを越えて、他者との関係を描いてしまうものなのか。

必ずしも虚像だったとは思わない。だが不十分ではあったのだろう。じっと座って気持だけでのぞきこんだときは、空々漠々と何も映ってないからっぽの池と思われた自分自身の中におらずと手を入れてみると、私を形づくっているのは私だけではなかったということであろう。

「此岸の家」はまだ水面に近い比較的澄んだ部分をすくい上げたとすれば、「あの夕陽」は水底に近い暗い泥の一部をかきまわしてしまったように思われる。他人を<sup>E</sup>ギセイにしても生き直そうとした自分自身の底深い業の姿を、改めてつきつけられた格好だ。

言葉とは不思議なものだ。他人に自分の考えを伝えたり、事件を知らせたりする手段だけではない。自分の意志を越えて自分自身をあばき出してしまうおそろしい力がある。自分が決して自分で出来上がっているものでないことを明らかにしてしまう。「私のなかの他人」の顔を写し出してしまふ。

この五年間かかって、そういうことがわかりかけてきた。自分に手ごたえの感じられる言葉を少しずつふやしながら小説を書くということは、結局、否応なく他人と出会うことだ。そういう仕方ではか私は他人と出会うことができない。もともと自閉的な性格のうえに、十六歳のとき敗戦、引き揚げという事件にさらされて、私の心はすくみあがってしまったからだ。

<sup>③</sup>まともな時代のまともな人間なら、二十歳でちゃんと現実生活のなかでやっていることを、私は四十歳を過ぎてから小説というまわり道を通ってやり始めていることになる。だが私のことを書くことが自分の中に閉じこもることではなく、小説を書くことは生きることと別ではない——その覚悟みたいなものだけは、もう後戻りすることはないだろう。

(日野啓三『私のなかの他人』より。一部原文を変更した箇所がある)

問一 傍線部A～Eに関し、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部①「思わず私は身震いした」のはなぜか。その理由としてもっともふさわしいものを次の選択肢の中から一つ選んで番号で答えなさい。

- ① 急に靴音が聞こえてきて驚いたから。
- ② 誰の靴音かわからず、身近に住む人も知らない自分に驚いたから。
- ③ 靴音が消えた後の空白で自分の中になにもないことに気づいたから。
- ④ 小説を書いていく自信がないことに気づかされたから。
- ⑤ 靴音がこんなにも自分の内面に影響を与えたことが怖かったから。

問三 傍線部②「私自身が驚いた」のはなぜか。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

問四 傍線部③「まともな時代のまともな人間なら、二十歳でちゃんと現実生活のなかでやっていること」とはなにか。本文中から抜き出しなさい。



受験番号

【一】

A
B
C
D
E

【二】

A
B
C
D
E

【三】

A
B
C
D
E

【四】 問一

A
B
C
D
E

問二

I
II
III

問三

--

問四

--

問五

--

問六

--

問七

--

【五】 問一

A
B
C
D
E

問二

--

問三

--

問四

--